

平成19（2007）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（社会情報学コース・特別選考枠）
入学試験問題
専 門 科 目

（平成18年8月21日 14：00～15：30）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. 本冊子は、社会情報学コース・特別選考枠の受験者のためのものである。
2. 本冊子の本文は2ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙は2枚ある。問題ごとに解答用紙1枚を使用すること。なお、解答用紙のみが採点の対象となる。
4. 解答用紙の上方の欄に、問題の番号及び受験番号を必ず記入すること。問題番号及び受験番号を記入していない答案は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 解答は日本語によるものとする。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏 名	

社会情報学 第1問 次の文章(ロバート・C・ソロモン、フェルナンド・フロレス著(上野正安訳)『「信頼」の研究』(シュプリンガー・フェアラク東京、2004年)では、二つの異なった権力の形を示している。これに関連して、次の問に答えなさい。

(1)「権限のラインに沿って認められた力は、すでにその中に信頼が組み込まれている」(下線部①)とは、どのようなことか説明しなさい。(200字程度)

(2)「信頼を、他に選択がないゆえの不本意の必要性として考えるのは間違っている」(下線部②)のはなぜか。文章に即して説明しなさい。(200字程度)

(3)筆者らの言う二つの異なった権力のうち一つを選んで、インターネット上のサイバースペースにおいて機能している具体例をあげ、その意義と限界について論じなさい。(800字程度)

信頼と管理は両立しない。なぜならば信頼の核心は自由だからである。人々を信頼することは彼らの責任感(あるいは誠実性)を当てにすることである。つまり、彼らが信頼を裏切ることを選ぶかもしれない可能性は認めながら、彼らは信頼に値する方法で行動することを選ぶと信じることである。誰かを信頼するということは、その人がわれわれの期待を理解し、障害を克服する方法を考え出すと期待することである。しかし、本質的に自由と結びついているため、信頼は常にリスクを伴う。信頼は常に壊れやすい。また、権力の座にいる者は信頼を使ってではなく、権力を使って命令することを好む。ビジネスの新しい用語法ではこれを偽装すべきとしているため、権力の賦課はしばしば信頼の問題として提示される。しかし、従業員が懲罰の脅しのもとで命令どおり行動するのを期待することは、彼らを信頼していることにはならない。夫が妻を家に閉じ込めていれば彼女を信頼しているといえないのと同じである。しかし、人はなぜ権力による安全性より、信頼の不確実性とリスクを受け入れるべきなのか?別の言葉でいえば、なぜ信頼であって、権力でないのか?

権力は二つの異なった形(しばしば相互関連しているが)で理解することができる。第一は力そのもの、恐怖の賦課を通じた脅しとしてである。第二は権限、正統な権力、勝ちとられた権力(人が「シェイクスピアの権威」になった時というように)、権力を行使する相手によって認められ尊重される力である。力そのものは恐怖と破壊性を生み出すだけである。それに対して、権限のラインに沿って認められた力は、すでにその中に信頼が組み込まれている—上役の能力に関する信頼、その人が会社のためを思っているという一体感への信頼、彼あるいは彼女が単なる権力、暴力、強制による脅しでなく、自分の権限を正しく認識していることに対する信頼などである。われわれがかかりつけの医者信頼するのもこの感覚である。それはわれわれの健康が彼らの手の内に握られているからではなく、彼らの知識、権限、そして彼がわれわれの健康を考えてくれているから信頼するのである。

②信頼を、他に選択がないゆえの不本意の必要性として考えるのは間違っている。厳しい制裁処置に裏付けられた信頼は、とうてい信頼とはいえない。人はそのような環境のもとでの信頼でも常に選択であると論ずるであろう。信頼ではなくそれに代わるものが必要

に直面した嫌々ながらの恨みに限定されている時においてでさえそうである。しかし、これは確実に極端に薄められた意味での信頼である。権力を物ともせず信頼することを決めるのは必死で気高い行為であるが、信頼および信頼することの決定は、常にわれわれの手の内にあるとあってよい。一方、正しい権限に基づく信頼は強制によるやむを得ない協力や恐れからくる服従とは違うもの—実際それとは反対—である。

社会情報学 第2問 次の文章は、名和小太郎『情報の私有・共有・公有』（NTT 出版、2006年）による、Garret Hardin, "The Tragedy of the Commons", Science, 162 (1968)の要約である。これを読んで以下の設問に答えなさい。

近代以前の英国にはコモンズと呼ばれる土地があった。これはだれもが利用できるが、だれの所有にも属しない土地であった。このコモンズが17～18世紀に生じた囲い込みによって荒れてしまった。なぜか。これがハーディンの設問であった。

コモンズを使っている1人の牧童が n 頭のウシを飼っていたとしよう。この共有地を利用している牧童が m 人であったとすれば、そのコモンズが供給している牧草は $m \times n$ 頭分である。

ここで1人の牧童が自分の利益のためにウシを手持ちの n 頭にくわえてさらに1頭増やしたとしよう。コモンズ全体としては1頭分の牧草が不足することになる。これは許せる量だろう。だが、ほかの牧童も同じように考えてそれぞれ $n+1$ 頭に増やすと、このコモンズでは m 頭分の牧草が不足することになる。この不足分はもう無視できる量ではないだろう。

だからといって、どの牧童もこれで満足することはないだろう。かれはさらに $n+2$ 頭、 $n+3$ 頭と自分の飼う頭数を増やすはずだ。この競争はとどまることがなく、そのあげく、牧草は枯渇し、コモンズは荒廃する。これがハーディンの答えであった。かれはこの荒廃はコモンズにだれもが自由にアクセスできることに原因があり、この現象を「コモンズの悲劇」と名づけ、同じ現象が近未来に地球規模で再現するだろうと予言した。

ハーディンは後日コモンズの悲劇を回避するためには社会主義と私有化の方法がある、と注釈している。社会主義を選べば全牧草地にわたり計画的な管理ができる。逆に牧草地を個人に分配してしまえば、個人はその私有地を大切に扱うはずだ。ハーディンの論文はその後、環境問題の研究者にしばしば引用されるものとなった。

(問) インターネットをコモンズとして考えた場合、1990年代にインターネットの民間開放が行われたことから、インターネットは「コモンズの悲劇」を回避できたという意見がある。この意見について、あなたはどのように考えるか？自分の立場を明確にして、インターネットの仕組み、サービスのあり方、利用のされ方などの観点から、その理由を述べなさい。